

多摩川源流大学による源流域の自然保全活動及び教育活動

東京農業大学 多摩川源流大学プロジェクト

はじめに

源流とは、水が流れ出る原点あるいは源と理解されている。生物が生きるためには水が欠かせない。その大切な水が流れ出る源流は生命の源であるともいえる。天から降り注ぐ恵みの雨は最初の一滴となり、その一滴は集まって幅わずか数cmの川になる。しばらく下ると渓谷となって清水を流し、渓谷を重ね小河川となって源流の郷（山村）を潤す。さらに支流を集め中河川となって農村を育み、やがて大河川となって都市を満たし、最後に大海へと注ぎ出る。そして、水は再び海面で蒸発し雨となって源流に降り注ぐことから、循環をしている。

こうした循環の中で豊かな森林がつくられ、その森の恵みにより人々の郷がつくられ、峯越しの交流をとおり源流の暮らしと文化が育まれてきた。これら源流の郷は、その多くが奥地の森林地帯に存在しており、いわゆる山村地域と重なる。今日、源流の郷の多くは、我が

国経済社会の不均衡発展やグローバル化の中で、条件不利地として取り残されることとなり、さらに急速に進む少子高齢化とも相まって存続の危機に瀕している。しかし、これら源流の郷は自然条件が厳しいものの、豊かな森林資源を利用し、峯越えの交流を行ってきたことから、ある意味、安心・安全な暮らしと営みを可能にし、人々が生きる集落を形成することが可能であった。

したがって、これら源流の郷には、森や自然と共存する先人の様々な暮らしの「知恵」と生業の「技」があり、その地特有の源流文化を形成してきている。今日、気候変動や温暖化など、地球規模の環境問題が明らかとなる中で循環型社会の構築が世界的な課題となっている。

このような中で「多摩川源流大学」は改めて今、源流の郷を含む源流域を見つめ、源流域で様々なことを実際に体験し学ぶことで、循環型を意識したこれからの



地域で活躍できる人材を育てる

社会づくりを担う人材の育成を目的として設置され、活動を続けてきた。



源流域を学ぶ

活動場所

多摩川源流大学（以下源流大学とする）では、山梨県小菅村をメインフィールドに活動を行ってきた。大学が地域で活動する際、一番大切にしなければいけないのは信頼だ。地域に長くかかわり地域の人々に信頼される活動にしなければならない。そこで本活動では東京と村に事務室を構え、村のNPOと協力し学生の活動をサポートしている。また、メインの活動場所である山梨県小菅村も村役場、NPO、住民が大変協力的に学生の受け入れを行っている。それにより、学生は様々な場所で実習が行え、メニューの充実にもつながっている。また、源流大学は村内の廃校になった小学校を利用し実



山に囲まれた山梨県小菅村

習などの拠点にしているが村内に特別な宿泊施設を持たないことで、村内の旅館や民宿に順番に泊まり、その宿の料理、サービス等への学生の意見を提案し村の地域経済の活性につながるような取り組みも行っている。

活動内容

●地域で活躍できる人材を育てる

源流大学には、『基礎コース』『応用コース』という地域で活躍できる人材を育成するための授業を二つ設置している。基礎コースでは、毎年多摩川を取り巻く自然環境や市民活動・歴史。全国の河川環境・農山村の現状、他流域の源流、企業の森づくりなど川や流域にちなんだ講義を様々なスペシャリストを学内および学外より招いておこなっている。



様々な専門家が授業を行う

応用コースでは実習だけではなく、最終報告会にむけて、プレゼンテーションや調査手法などについても、勉強を行っている。

これらの授業では、源流域の自然、生活、そしてそれらに関わる源流文化を「源流学」「本物体験」をキーワードに、様々な暮らしの中に入って生業をまるごと体験できるようにしている。そのため、源流域に住む村民の持つ、自然を利用した「知恵」や「技」を現場で体験できるような実習を作成している。具体的には、「農業体験実習」として源流大学で借りている畑で栽培から販売までの一連の流れを学んだり、各農家に送られて、その家の農作業のお手伝いをしたりする。大学の実習では体験できない、地元農家の方と一緒に作業することで、源流域での農作業の大変さや生活の知恵などが体験できる。

他にも遊歩道整備や間伐作業等を体験できる「森林体験実習」や源流の自然や文化、歴史を学ぶ「源流文化実習」など様々なメニューを用意している。

これらの体験を通し、自然の中で生きていく「技」や



農作業体験



森林体験実習

「知恵」を身につけるとともに、多様な世代と関わることでコミュニケーション能力の向上を学ぶこともできる。

これからの日本の「地域」を担う人材として、机上の理論だけではなく、実践の力をもつ人材を育てている。

活動で大切にしている事

プログラム作成の際は以下の5つの点を大切にしている。

1. なるべく村民と話せる場を設ける

実習を行う際に、農作業などの行程や手順、技術を学ぶことは大切だが、それと同じくらい大切なものとして「村民と話す」ことに重点を置いている。その土地の住民と話しをすることで、その地域の雰囲気やその土地の話、農作業のコツなどを聞ける機会になり、また大学の中では経験することが難しい世代を超えてコミュニケーションをとる機会にもなる。

2. 体験実習用の畑を持つだけでなく、村民の畑でも作業する

大学体験実習用の畑を持ってしまうと、そこだけで実習が完結してしまうようになる。これは、本当の村の農業を行っている方々の畑とは異なる。この村で生活を



して、どんな畑をやっているかを、実際に学生が訪れてそこで見た・聞いたすることで小菅村らしい農作業ができると考えている。



3. 少数（2～4名）の学生と1名の住民講師

少数の学生と住民で組み合わせることによって、学生も村民も声を掛けやすくなる。お互いに顔が見える関係で作業を行えるということは、学生にとっても充実した時間となり、また村民にとっても孫を教えているくらいの気軽な気持ちで受入れてもらえる利点がある。



4. 村民の農事期に合わせた実習内容にする

農事期とは種を撒いたり、収穫したりする作業の適

期のことだ。実習で多くの学生が来るから、それに合わせて収穫を早めたりするのではなく、村の方々が行っている農作業の時期に併せて実習の内容を決めている。



5. 学生自ら、考え、行動する。

実習では、村民と話したり学生が発表したりする機会などを設けることで学生自らが進んで学んでいく姿勢を付けてもらえるようにしている。また、作業準備の段階で作業内容や天候を伝え自ら持ち物や服装などを考えてもらうようにしている。自主的に考え・行動することが、学生の今後の生活や社会に出たときに役立つようにと考えている。



また、すべてのプログラムは住民、行政、各種団体と協力し、地域のニーズを得てから作成するようにしている。このように地域のニーズと学生の学びが合致するようにプログラムを作成していくことが重要である。

活動の広がり

本活動では、川の循環、流域の概念から下流域の団体、他流域の団体とも協力し授業を行っている。多摩川には水辺で活動する多くの市民団体があり、例えばとどろき水辺の楽校などの団体と連携して総合的な流域理解のために、活動している団体に学生が参加し、単位と

して認める流域活動を実施している。これらの活動は、過去には国土交通省関東地方整備局湯西川工事事務所と共催で行った鬼怒川実習や他流域など現在でも福島県鮫川村、岩手県一関市での実習等大きく広がっている、また、今後更なる広がりを計画している。



岩手県での実習



とどろき水辺の楽校での実習

このことにより学生達は流域の概念というものが生まれ、今まで他人事であった源流域の問題を下流域に住む自分たちにとっても身近な問題であったと考えるようになる。また、他の地域を知ること自分たちの活動する流域との違いや応用できる点を発見できるのもこの活動の特徴であるといえる。

その他の活動

私達はこのような流域の問題、地域の問題は、多くの方に考え知ってもらう必要がある活動であると考えている。そこで、一般向けの講座を開催するなど環境問題、自然の美しさ素晴らしさを広く知ってもらう活動を行っている。東京農業大学では一般向けの講座を開講しており、本活動でも年に5本程度の講座を開講している。例えば毎年行っている親子で多摩川の源流を遊びつくすという講座では、1泊2日思い切り源流の川で遊んでもらうという講座で、大学の先生、村民講師、大学生がともに作る、参加者からも大変評判が良く人気がある講座である。このように本活動では多様な人が、様々な形で活動に関わることで大学生はもちろん、地

域住民、下流域の市民等多様な参加者の人材の育成の場となり、ひいてはその地域の環境の保全、源流文化の保全ということにつながる活動を行っている。



一般向けの講師体験コース

活動の今後

源流大学は今年で開校して10年目を迎える、多くの地域、関係者に支えられここまで歩んできた。

様々な効果がある中でも特に大きな成果として上げられるのが「源流放課後の会」という学生による有志団体の設立である。この有志団体は授業に参加した学生が「もっと地域と関わりたい」と自分たちで計画し村で様々な活動を行っているものである、このように村内で活動していく中で村の行事に参加するなど学生、村民がお互いに刺激のある関係となっている。村内でも住民は住民講師として参加したり、村の新たな特産品を学生と共に開発したり、新たなイベントを行ったりしている。このように学生達の学びの場である地域が自分達の魅力や問題点を見直すという効果もあがっている。また、大学生は一番自然体験活動から遠ざかっている年代でもある。そのため、このような体験を大学時代にしておくことは社会生活や日常生活などあらゆる場面で役に立つと考えられ、社会への普及効果は高いと考えている。また、全国の森林問題や水資源を考える際、この源流大学モデルが大変効果的であると考え、各地の源流域に源流大学が生まれることが期待されている。

しかし、地域にとって10年とはまだほんのはじまりにすぎない。特に水源林のような環境は2-3年で完成するものではなく長く人の手によって守られていくべき存在である。そのためには人材育成こそが最も必要な活動であると我々は考えている。本活動も長く継続し、また、村と相互の協力体制をより強固とすることが求められている。そこで村役場、住民講師、NPO、村の諸機



関、大学と連携し、より魅力的プログラムの開発、将来地域を担う人材の育成などに力を入れていくために「チーム源流大学」を結成した。そこで、例えば、毎年村民講師のスキルアップのために「住民講師養成講座」という意見交換会やワークショップを開催しているのだが、その場に学生や若い人に参加してもらい講師陣の育成を行うことで新たなプログラムの開発や、伝承を行っていきたいと考えている。また、多摩川流域で活動している団体への参加、それらの団体の上流域での活動のサポートや他流域団体との連携、世間への周知として環境教育や伝統文化を学べる一般向け講座の充実などを計画している。この源流大学モデルが、各流域で源流域の水資源の理解やそれらを担う人材育成のモデルプランとして波及していきたいと考えている。



畑での収穫



廃校を活用した拠点

東京農業大学 多摩川源流大学プロジェクト